

〔書言字考節用集二〕乾坤湊説文水上港口日本紀 水門日本紀

〔東雅三〕津地輿津略○中 ミナトといふは水門なり、舟船の出入る所なれば然いふなり、ミナトといふ詞なり、阿波國風土記には、湖の字讀てミナトといひ、倭名鈔には、説文の水上人所會なりといふ説を引て、湊の字讀てミナトといふなり、

〔倭訓栞前編三十〕みなと 常に湊をよめり、水上人所會也と注すれば、水人の義にや、或は港をよめり、日本紀に、水門をよめれば、みと、意同じ、古事記には水戸と書り、紀の歌萬葉集にも、みなととよめり、又萬葉集に湖もよめり、

〔類聚名物考地理二十八〕水門古事記 みなと 湊湖萬葉

水のおつまる門戸故に、水のかど、いふなり、乃加の約は奈となれば、すなはちみなと、いふ、みは水の約なり、湊は唐の文字にて、萬葉集には湖を訓せるは、これも水のおつまる所故なるべし、

湊略○中  
湊 みなと 水門 湖萬葉九

湊は輻湊などつゞけば、物のあつまることをいふなり、萬葉集延喜式には湖字を書り、水海とは異なり、日本紀十四にもみな水門と書り、水のせまれる所なり、追門せと、いふも、せまる戸なり、是は海門をいふ門戸にたとへたるなり、略○下

〔古事記傳五〕水戸水門と書るも美那斗訓べしと訓べし古く美斗と云訓も有て、今はあさる地名もあに、あはのみと、書紀武烈卷の大御歌の哀世を、一本に彌儼斗有と分注あり、又齊明卷の大御を渡るとあり、

歌にも、彌儼斗と云ことあり、萬葉歌にも多し、美斗とよめ即水之門の意にて、門は海の出入る戸口なり、島門、河門、書紀、神代卷に、乃往見粟門及速吸名門、然此二門云々、仲哀卷に、自穴門至向津野

大濟爲東門、以名籠屋大濟爲西門などあり、那は之に通辭なり、右の速吸名門の名を、神武卷和には

和